

平成21年度海外学術調査総括班フォーラム
地域別分科会
VI サハラ以南アフリカ

「東アフリカでの人類学調査と、JSPS ナイロビ研究連絡センターでの経験」

長崎大学大学院国際健康開発研究科
波佐間逸博

JSPSナイロビ研究連絡センター

- ・英語名はJSPS Nairobi Research Station。1965年設立。のべ68人の研究者を駐在員として派遣。
- ・東アフリカで海外学術調査に従事する研究者に対する支援、東アフリカ地域を中心とした学術の国際交流の促進をおこなっている。
- ・現在の駐在員は、長崎大学熱帯医学研究所に所属し、医療人類学を専攻している駒澤 大佐(こまざわ おおすけ)氏。2011年3月まで駐在予定。

海外フィールド研究の ベースキャンプとしての役割

- 各分野の研究者がケニアを中心とする東アフリカ各地域での現地フィールド調査の拠点として当センターを訪問。

その主な来所目的は、

- (1) 調査許可申請証取得手続き
(当センターにて推薦文を発行。四半期平均5件発行)
- (2) 図書資料(地図、学術論文、その他書籍)利用
- (3) 情報収集(ケニアの大学・研究機関・研究者の情報、各地域の治安情報—特に2007年12月ケニア大統領選挙前後のケニア国内、ナイロビ近郊の治安情報。ケニアに滞在予定の研究者や来所者への注意喚起。道路などインフラ情報)
- (4) 調査機材の準備
- (5) 各研究者同士の研究情報交換

過去4年間の来所研究者数(延べ数)

	2005年	2006年	2007年	2008年
第1四半期 (4-6月)	—	142	99	121
第2四半期 (7-9月)	—	341	292	169
第3四半期 (10-12月)	177	200	100	89
第4四半期 (1-3月)	272	245	121	127

ナイロビセンターの近年の動向

(1) 存続問題

独立行政法人整理合理化計画(2007年12月24日閣議決定)

「海外研究連絡センター(カイロ、ナイロビ)については、効率的な業務運営の観点から、独立行政法人評価委員会による評価等を踏まえながら、活動状況の検証に努め、廃止等見直しを検討する」

→アフリカ学会から存続願い(2008年1月11日、2月1日、4月15日)

「海外研究連絡センター(カイロ、ナイロビ)については、交流相手のニーズ・特性、我が国の研究者の意見を考慮しつつ、費用対効果の検証を行うほか、研究者へのサービス向上を図るなど不断の見直しを行う」(学振第二期中期計画(2008年4月～2013年3月):3月28日作成)

→国内学会・大学から49通、国外機関から11通の存続要望書の提出(4月15日)

「海外研究連絡センターについては...アフリカ地域においては、大学等の事務所・拠点数が非常に少なく、日本人研究者の海外研究の足かかりとなるような拠点が乏しいという現状がある。増大するアフリカ地域研究などの重要性・学術研究の特殊性に鑑み...当該地域における拠点性など質的な要素についても留意した運営へと転換を図った上で、学術動向や海外情報収集に努め、機能の充実を図っていく必要がある」(学振の平成19年度(学振の第一期中期計画の最終年度)の実績評価:8月1日決定)

2008年8月学振からアフリカ学会に、2009年度にナイロビ・センターに派遣する研究員の推薦依頼。学会が推薦した人物が任命。

(廃止はとりあえず回避)

ナイロビセンターの近年の動向

(2) アフリカ研究の推進

- アフリカ研究を推進するためには、アフリカ諸国の大学や研究機関、そして政府関係機関等との連携を強化することが不可欠。ナイロビ・センターは決定的に重要な役割を果たしている。
- とくに東アフリカ諸国と我が国とのあいだの学術に関する国際交流を促進するために、中心的な機能を果たしてきた。

東アフリカにおける学術交流 2006年度～2008年度

	開催年月	分野	テーマ (参加人数)	会場	共催機関	主な演者(開催時の所属)
1	2006年9月	自然人類学 考古学 開発学 文化人類学	『合同人類学セミナー』 (130名)	在ケニア日本大使館 多目的ホール (ケニア、ナイロビ)	①BIEA(英国東アフリカ研究所) ②IFRA(仏国アフリカ研究所) ③ケニア国立博物館	①フレデリック・キャロ(国立博物館) ②ステファニー・ウィニー・ジョーンズ(BIEA) ③バーナード・C・マッセリエール(IFRA) ④波佐間逸博(京大)
2	2006年9月	教育学	『高等教育機関の国際協 力ーケニアと日本ー』 (70名)	在ケニア日本大使館 多目的ホール (ケニア、ナイロビ)	①広島大学 ②ケニアツタ大学 ③ケニア教育省	①内海成治(阪大) ②オリブ・ムゲンダ(ケニアツタ大学) ③ジョージ・ゴディア(教育省)
3	2007年6月	古生物学 自然人類学	『東アフリカ先史時代: 東 アフリカの博物館におけ る化石と文化遺産の資料 管理および研究潮流』 (150名)	ケニア国立博物館 ルイスリーキー講堂 (ケニア、ナイロビ)	①東アフリカ古生物・古人類 学会 ②ドイツ大使館 ③中国大使館 ④スペイン大使館 ⑤ケニア国立博物館	①中務真人(京大) ②中野良彦(阪大) ③エマ・ムブア(国立博物館) その他30発表
4	2007年10月	文化人類学	『自己/他者の問題を再 文脈化するーアフリカに おける人間学に向けて』 (300名)	マケレレ大学 セネートカンファレンス ホール (ウガンダ、カンパラ)	①京都大学アフリカ地域研 究資料センター ②マケレレ大学	①森口岳(一橋大) ②太田至 ③白石壮一郎 ④佐川徹 ⑤佐藤靖明 ⑥大門碧 ⑦波佐間逸博(以上、京大) ⑧マイク・クリア(デイスター大) ⑨長島信弘(中部大) ⑩エドワード・キルミラ ⑪ローズ・キルミラ ⑫チャールズ・ルワブクワリ ⑬ウォツナ・カマルワ ⑭オコット・ベンジェ(以上、マケレレ大) ⑮椎野若菜(東外大) ⑯アンソニー・シンプソン(マンチェスター大) ⑰バレンティン・ムディンベ(デューク大学)
5	2008年3月		『日本における調査研究 の機会に関するセミナー』 (50名)	在ケニア日本大使館 多目的ホール (ケニア、ナイロビ)	①JSPS東アフリカ同窓会 ②日本国大使館広報文化セ ンター ③JICAケニア事務所	①菊地斉(日本国大使館) ②江崎千絵(JICA) ③ハッサン・ウェレ(東アフリカ同窓会) ④アリ・アブドゥルラザック(東アフリカ同窓会)

6	2008年 8月	資源保全学	『野生動物保全の再概念化:生活者が共鳴し得る活動に向けて』 (70名)	在ケニア日本大使館 多目的ホール (ケニア、ナイロビ)	①ケニア野生動物公社 ②早稲田大学 ③福島大学	①目黒紀夫(東大) ②モーセス・オケロ(野外調査研究所) ③モルデカイ・オガダ(ケニア野生動物トラスト) ③ムトゥア・C・ムショキ(ケニア野生動物公社) ④山根裕美 ⑤安田彰人(以上、京大) ⑥西崎伸子(福島大) ⑦岩井雪乃(早大)
7	2008年 9月	文化人類学	『アフリカ牧畜社会の持続可能な発展に向けて:牧畜研究と開発実践を接合するための新たな可能性を探る』 (30名)	日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター セミナールーム (ケニア、ナイロビ)	①ナイロビ大学アフリカ研究所 ②京都大学アフリカ地域研究資料センター	①ダニエル・カンダゴル(エガートン大) ②ゼレマリアム・フレ(ユニバーシティカレッジロンドン) ③太田至 ④波佐間逸博 ⑤孫暁剛(以上、京大) ⑥アリ・ワリオ(国連人道問題調整事務所) ⑦アイザック・ニャモンゴ(ナイロビ大) ⑧湖中真哉(静岡県立大) ⑨ケネディ・A・ムクトウ(ムズンベ大)
8	2008年 9月	土木工学	『第2回土木工学に関する国際会議』 (100名)	サンドサンビーチホテル (ケニア、モンバサ)	①京都大学 ②ジョモケニアッタ農工大	①ウォルター・O・オヤワ(ジョモケニアッタ農工大) ②渡辺英一(京大) ③木村亮(京大) その他32発表
9	2008年 9月	土木工学	『国際土木工学シンポジウム』 (50名)	サンドサンビーチホテル (ケニア、モンバサ)	①京都大学 ②ジョモケニアッタ農工大	①ウォルター・O・オヤワ(ジョモケニアッタ農工大) その他20発表
10	2008年 11月	熱帯医学	『アジア・アフリカ学術基盤形成事業東アフリカ熱帯病セミナー アフリカにおける「やまい」に対する多角的取り組み』 (40名)	在ケニア日本大使館 多目的ホール (ケニア、ナイロビ)	①長崎大学ケニア拠点	①椎野若菜(東外大) ②駒澤大佐 ③二見恭子 ④嶋田雅暁 ⑤金子聡(以上、長大) ⑥マティル・ムワウ(ケニア中央医学研究所) ⑦サリー・ムテンガ(IHI)
11	2008年 11月	熱帯医学 保健学	『第一回野口英世アフリカ賞受賞者講演会』 (500名)	ナイロビ大学 タイファホール (ケニア、ナイロビ)	①在ケニア日本大使館 ②JICAケニア事務所 ③長崎大学ケニア拠点 ④ナイロビ大学	①ブライアン・グリーンウッド(ロンドン大学衛生熱帯医学校) ②ミリアム・ウェレ(ケニア・エイズ対策委員会)

ナイロビセンターの近年の動向

(3) 研究者ネットワークの構築

- JSPS東アフリカ同窓会の設立(2008年)
会員19人(ケニア、タンザニア、エチオピア)
学振同窓会としては唯一、RegionalなAlumni
 - (1) 2008年3月JICA・大使館との合同セミナー
 - (2) 2009年2月タンザニアでの役員会議
 - (3) 2009年3月AICAD (African Institute for Capacity Development: アフリカ人づくり拠点)との合同セミナー「現代の研究リーダーを育成する」開催

ナイロビセンターの近年の動向

(4)今年度開催予定の学術集会

タイトル	テーマ(分野)	開催日時 開催地 参加者数(見込)	共催機関	参加予定講師
1 「生物多様性保全会議」	「東アフリカエコシステム」 (保全生物学)	2009年8月4、5日 ケニア野生動物公社本部、ケニア国際会議場 (1000名)	African Conservation Centre(ACC) ケニア野生動物公社(KWS) 京都大学 東京大学 UNEP	山越言(京大) 目黒紀夫(東大) Nehemiah Rotich (UNEP) Wagari Maathai Charles Musyoki(KWS) David Western(ACC) ほか17名
2 「東アフリカの時速可能な開発のための伝統的な技術と知識の現代的な活用」	(工学)	2009年9月 (60名)	JSPS東アフリカ同窓会 ジョモケニアッタ農工大 名古屋大学 NCST JICAなど	名古屋大と東アフリカから数名
3 「地域研究から広がる可能性」	「人口静態動態調査システム(DSS)の開発と発展」(医学)	2009年10月下旬 ナイロビ (50名)	ケニア中央医学研究所 長崎大学 JICA	嶋田雅暁 金子聰 皆川昇 一瀬休生 二見恭子 門司和彦 下町多佳志(以上、長大) 福村一成(宇都宮大) マティル・ムワウ(ケニア中央医学研究所) ジェームズ・コピヨ(長大ケニア研究拠点) ガブリエル・オウオル(マセノ大)
4 「持続可能な多文化共生社会にむけてのオルタナティブ・ジャスティスの理念と実践」	「アフリカにおける暴力をめぐるクライシスと和解」(社会学)	2009年12月 JSPSナイロビ (30名)	ナイロビ大学 京都大学 ケニア人権委員会	松田素二(京大) Mahmood Mamdani (コロンビア大) Isaac Nyamongo(ナイロビ大) ほか2名

現地調査

調査許可の取得

- 許可申請は科学技術評議会に（National Council for Science and Technology: ケニアはNCST、ウガンダはUNCST）
- 申請手続きには、(1)写真、(2)履歴書、(3)研究計画書、(4)申請書、(5)申請料などが必要
- ケニアでは申請から2週間、ウガンダでは1か月程度で許可証が発行
- ケニアでは、医学研究など生命倫理上の審査が必要と判断された場合、申請者に対し、別途の手続きをするように求められる。手続きに必要な書類はNCSTから配布。

詳細は配布資料を参照のこと

現地入り

- 調査許可発行の後、県知事と会う。NCST側が準備してくれた紹介状を示す（提出を求められることもあるので、コピーをとっておくこと）
- 知事室への訪問は、義務付けられている。調査の目的、村落への住み込みなど、調査手法を説明する。このとき、県全域の治安・道路事情、先行調査者の有無について情報収集する。
- 可能であれば、県より下位の行政レベルの行政官宛の紹介状を書いてもらう。

現地研究者との研究連携

- ・「受入れ研究者」のサイン(ウガンダ)やレター(ケニア)は、許可申請に不可欠
- ・「受入れ研究者」は、指定の研究機関・大学の所属者でなければならない(国立機関・大学が原則)
- ・マケレレ大学社会学部(ウガンダ)
- ・ナイロビ大学アフリカ研究所(昨年、「人類学・ジェンダー・アフリカ研究研究所」として改組)。
- ・ケニアにおける自然人類学調査ではケニア国立博物館、医学・疫学・医療人類学調査の場合はケニア中央医学研究所がカウンターパートになっている。
- ・そのほか、名大の農学プロジェクトはマセノ大学、京大工学はジョモニケニヤッタ農工大、広大の教育学プロジェクトはケニアッタ大。ケニア野生動物公社(KWS)や国際昆虫生理生態学センター(ICIPE)なども。

現地研究者との連携をとおしての 調査成果の発信

- 近年、「成果の発信」を、カウンターパートとともに現地でおこなう傾向が強まっている
- 学術交流と研究成果の地域への「還元」の連携融合の試みとしてのアフリカにおける学術集会の開催

「自己／他者の問題を再文脈化するーアフリカにおける人間学に向けて」
(RE-CONTEXTUALIZING SELF/OTHER ISSUES:TOWARD A HUMANICS IN AFRICA)

2007年10月2日(火)、3日(水)

於: マケレレ大学セネートカンファレンスホール



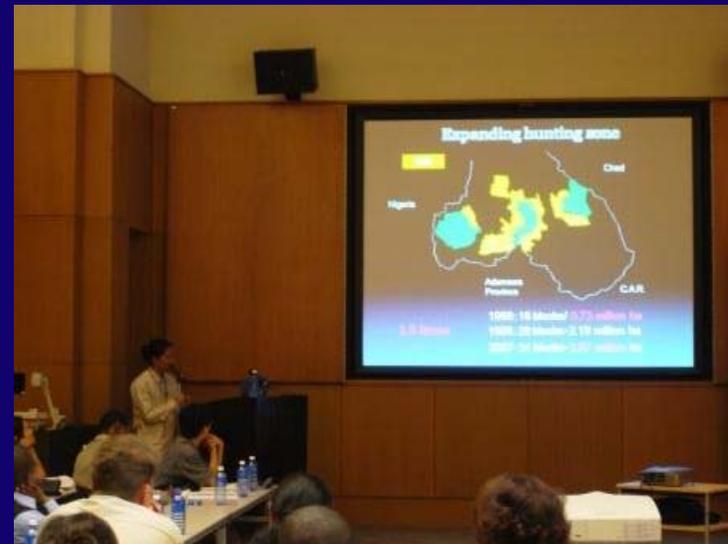
「Re-conceptualization of wildlife conservation: toward resonatable actions for conservation

(野生動物保全の再概念化:生活者が共鳴し得る活動に向けて)」開催

開催時期:2008年8月7日(木)

開催場所:在ケニア日本大使館(ケニア、ナイロビ)・多目的ホール

共催組織:JSPSナイロビ研究連絡センター、ケニア野生動物公社、早稲田大学、福島大学



「アフリカ牧畜社会の持続可能な発展に向けて： 牧畜研究と開発実践を接合するための新たな可能性を探る」
(Pastoral Societies in Africa: New Possibilities for Sustainable Development through the Interaction of
Scientific Researches and Development Workers)

2008年9月4日

於：日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター



おわりに

学振ナイロビの存在は、日本におけるアフリカ研究の発展にとって非常に重要

→ナイロビセンターの利用価値を知り、活用することによって、「閉鎖」に対抗する実績や「声」がでてくる。

研究成果の「社会への還元」と「海外への発信」の要請が高まってきたことにより、アフリカー日本の共同討議のための集会は、非常に盛んになってきている。

→近代的な知・技術とアフリカで「固有」な知・技術との融合を模索するトレンドの中で、この潮流は、ますます太い流れとなってゆくだらう。

→集会を「還元」や「発信」の単なるアリバイに終わらせず、実質的な討議を行える工夫を不断に練り続ける必要があるだらう。

。

滞在調査でのトラブル(1)

- 2006年2月ナイロビ。50代後半男性研究者。全身の麻痺と言語障害。脳腫瘍と診断。1週間の入院ののち医師同伴で空港へ。日本側でも医師が空港に待機。検査・入院・治療・搬送費用は1千万円(帰国後手術費は除く)。
- 2006年3月ナイロビ。村落調査中に精神障害による行動不能。いったんは回復したものの、翌日正午にナイロビの街中で再発。8日間入院で費用は80万円。(保険には未加入)

現地調査でのトラブル(2)

- 暴行

2006年3月ナイロビ。女性研究者が調査後に夕方7時に徒歩で帰宅途中、バス待ちを装った男性により強盗されたうえ、性的暴行を受ける。ナイロビ病院で傷の手当て、エイズ検査と感染予防のための洗浄と投薬。調査は中止。

→若手女性研究者は年々増加傾向にある。シニア研究者は注意喚起を徹底すべき

